

絹の歴史散歩・伊予生糸と伊勢神宮

伊勢神宮では、平成 25 年 10 月に 62 回目を数える式年遷宮が行われました。式年遷宮とは 20 年に一度、社殿をはじめ御神宝や御装束などすべてのものを新調し、神様に新しいお住まいへお移りいただく儀式のこと。今から 1300 年ほど前に持統天皇が始められたと言われています。

神宮がお祭りしている神様は、かの有名な天照大神（あまてらすおおみかみ）。その天照大神の御装束などを新調するため使われているのが愛媛で作られる伊予生糸です。国産の生糸が姿を消しつつある中で、今も、上古からの伝統を守り続ける伊予生糸についてご紹介します。

〔遷宮祭の御料糸〕

式年遷宮に使われる生糸（御料糸）は、今から 8 年ほど前にご用命がありました。これを受けて、愛媛県西予市野村町にあるシルク博物館（館長 亀崎壽治氏）では、平成 17 年の春に町内で飼われた蚕の繭から生糸を作っています。蚕は、昔の蚕のように細い糸を吐く「あけぼの」という品種です。



飼育中の蚕



飼育開始から 26 日目にできた繭

同年 7 月には繭から生糸をとるため神宮から神職が来られ、おごそかに「生糸繰糸（そうし）始め式」が行われました。生糸は生繰り（なまぐり）といって、作りたての繭を煮て糸を繰っています。今では、こうした昔の手法を見かけることはありませんが、シルク博物館ではこの生繰りを基本にしていて、乾燥させた繭は使わないのです。

繭は熱風で乾燥させると中の蛹は干乾びて、蛾になって繭から出てくることはなく、湿気が無いため繭にカビが生えることもありません。貯蔵できるため、一年を通して生糸作りができ、どの製糸でも行われているのですが、敢えてその方法を採用しないといいます。「繭は昆虫が作った蛋白質なので、たとえ僅かでも熱にあたると変性してしまう。生糸本来の光沢を活かそうと思えば、生繭からひいた生糸の方が優れる」というのです。

今回作った生糸は、太さ 21 中と 14 中の 2 種類あわせて 201kg。通常、着物 1 着にはおよそ生糸 900g が必要なので、220 着分に相当します。21 中とは 9000m の長さがちょうど 21g になる生糸の太さのこと。通常の繭なら 7～8 粒の繭糸で一本の生糸にしますが、「あけぼの」は繭糸が細いので 9～10 粒を使います。同じ太さの生糸を作るにしても、細い繭糸を多く合わせた方が、太い繭糸であっても数が少ないものより、強くなしやかな糸になり、昔の織物に近いものができるのです。

〔御料糸と伊予生糸〕

式年遷宮は一時中断された時期もありますが、西暦 690 年頃から 20 年に一度続けられています。では、伊予生糸はいつ頃から御料糸に使われるようになったのでしょうか。



手許の資料によると、昭和 28 年 (59 回) に大洲市の今岡製糸がご用命を受け、つづく 48 年 (60 回) にも同社が受けています。更に、平成 5 年 (61 回) には、今岡製糸と榊田製糸などが統合した伊予蚕糸農協連合会が受けており、今回のシルク博物館で 4 回目になります。それ以前は残念ながら記録が見つかりません。式年遷宮の歴史の長さからすると、じつに最近のことですが、少なくとも 80 年間は、伊予生糸で作られた御装束を天照大神がお召しになっているのです。

(写真左 多条繰糸機による繭からの生糸づくり)

〔伊予生糸の良さ〕

伊予生糸は高品質な銘柄生糸と言われてきましたが、何が優れているのでしょうか。

一般に、生糸の良し悪しは、織物づくりに適した糸か否かで決まります。糸の太さのバラつきや、織る際に引っ張られても切れない強さと伸縮性、織りムラや染めムラの原因になる節 (ふし) などを基準に格付けがされています。(かつては 5A から D までの 8 等級)

最高級の品質とされる 5A ともなると、たとえ上質な繭や高い製糸技術が揃っていても、簡単にできるものではありません。それを伊予生糸はとり続けたのです。



(写真上 伊予生糸)

また、織物づくりの適性のほかに、製品にしてみても使って分かる品質があります。



伊予生糸で作られた織物 (左：スカーフ 中央：反物 右：帯)

かつて、京都の織物メーカーを訪ねたときに「伊予生糸は嵩高 (かさだか) なうえにコシがあって、硬質の糸だから」と言われたことがあります。『硬質』とは、生糸の質が硬いという感触のこと。帯地 (おびじ) には、擦 (こす) れても綻び (ほころび) にくい強

さのほかに、締りのよい伸縮性が要るので硬質な伊予生糸が最適だということです。この硬質さは、「四国山系の石灰質を含んだ製糸用水によるもの」というのが通説になっていますが、河川の水にカルシウム分が多く、軟水ながらやや硬質に近いため、生糸を糊状に覆っているセリシンが溶け出しにくいのかもかもしれません。

また、『嵩高(かさだか)』な生糸とは、時間をかけて丁寧に繭から生糸をひき出すため、蚕が糸をS字状に吐いて作った繊維のうねりが残り、ふんわりと仕上がった糸のこと。糸には弾力と膨らみがあつて、織物にすると柔らかさと暖かさがあるうえ、着物では着崩れしにくく、帯なら締め具合が良いといえます。

着物などの絹織物に求められるシャリやコシ、ハリ、ふくらみなど、一般に風合いといわれる織物の特性を、伊予生糸は素材として持ち合わせているのです。



伊予生糸で織られた白生地



先染めした伊予生糸で織り上げた帯

[技術の継承]

伊予生糸に関する最も古い記述は、「続日本書紀」に見られます。西暦 711 年に『元明天皇が桃文師を諸国に派遣し、錦(にしき)や綾(あや)の織り方を教え、翌年には伊豫のほか 30 か国に命じてこれを織らせた』とあります。また、927 年の「延喜式」には、中等の生糸を作る国として伊豫の名がでてきます。桑原や桑村など養蚕に因んだ地名があるように、愛媛では古くから生糸づくりが行われていたのです。

残念ながら、江戸時代には奢侈の禁止などによって一旦姿を消しますが、明治になると殖産興業の動きとともに興隆をみます。ただ、そのとき先人が苦勞したのは、養蚕・製糸の技術が無かったこと。産業が一度消えると、技術も途絶えてしまっていたのです。

その点、式年遷宮が 20 年に一度行われるのは伝統技術の継承のためにも大きな役割を果たしています。神宮からは、すでに次の式年遷宮における御料糸のご要望も頂いており、技術や伝統文化を守るうえでも、伊予生糸に期待されるところは大きいのです。

[参 考]

愛媛蚕糸業のあゆみ：平成 12 年、「愛媛蚕糸業のあゆみ」発行委員会

村上是哉(1926)：伊豫蚕業沿革史

本多岩次郎(1935)：日本蚕糸業史

[愛媛県農林水産研究所 池上正彦]